
男のひと

林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男のひと

【Nコード】

N0763B

【作者名】

林檎

【あらすじ】

最初、普通の小説にしようと思っていたけど、詩になってしまいました。友人達の話を中心に作りました。特に彼氏が居ない人に読んでもらいたいと思います。

(前書き)

短いので、最後まで読んでみて下さい。
読んで頂いた人達の見解をもとに手直ししました。

男のひとが、歌を歌う時、少しかすれるような声を出すのが好きだ。男のひとの声は荒々しいから、私の心は震えるように苦しくなる。

昔大好きだったパンクバンドのボーカルはふざけた髪型をしていて、それと同じぐらいにいい加減な感じでよくトランクスを脱いでいた。

男のひとが煙草の灰を落とす時が好きだ。指に煙草をはさんだまま、親指で叩いて器用に灰皿を鳴らす。男のひとより指の短い、私のような女のひとが、それをすることは出来ないのだ。

テレビ画面より何より、その音は一メートルの距離を置いて実際に聞くのが一番いい。

顔を崩して笑った時の男のひとが好きだ。それはその人が、まだ大人になりきれないことを教えてくれる。本物のそれを見られた時、幸せに思わなくてはならない。大抵の場合、それは自分に向けられるものではない。

体操服を着て重そうなエナメルバッグを抱えたそのひとは、とても上手に改札を抜けた。

男のひとの背中が好きだ。風の中、自転車の荷台に乗ってそれを眺める時、その人の何かが少しだけ分かるような気がする。

いつも誰かと一緒に居るあのひとは一心にペダルをこいでいた。それはほんの気のせいかと思う程しか感じられなかったけれど、私は少し涙ぐんでいた。

左利きの男のひとが好きだ。何をしても、他の人より不器用に見えるのだ。

坊主頭で全部ダボダボな、ちょっと怖そうなひとでも、鉛筆や箸を持つときにとても可愛いらしくなる。

薄い色のジーンズのポケットから、小銭を出して手のひらに広げる時の男のひとが好きだ。ポケットに入っている全てのものを、私は決して知ることがないからだ。

見ず知らずのひとがそれをしている時、細くて長い足の形がジーンズに現れるのを私は見ていた。

カラカラに喉が乾いてペットボトルの水を飲んでいる時の、男のひとが好きだ。近くでその横顔を、じっと眺めることができるのは、そんな時だけなのだ。

おでこから鼻筋を通して首が服にかくれるまで。その流れが鋭くて美しいひとは、近所のバス停にも居た。

ユーモアのある男のひとが、悲しみに涙を流すのが好きだ。疑う気持ちにならない自分をも好きになれる。

冗談だよ、と笑っていたあのひとの涙をもう一度見たい。

こんなに沢山の気持ちをもたらすことができたのは、きっと私が一人で居たからだと思うのです。

(後書き)

文章力改善したいため、微妙だったところや良いと思ったところ等あればなんでも教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0763b/>

男のひと

2010年10月15日22時44分発行